

幼年教育研究施設50周年のお祝い — 幼年教育研究施設（幼児学）の持続的発展を願って —

広島大学大学院医歯薬保健学研究院小児科学 小林 正夫

幼年教育研究施設50周年、誠におめでとうございます。

昭和40年に施設誕生、昭和50年には幼児学専攻修士課程の開設、その時に幼児保健学の初代教授として清水凡生先生（平成21年3月逝去、享年75歳）が医学部小児科から赴任されました。その後、平成元年に幼児保健学を基幹講座として幼年教育研究施設とともに幼年期総合科学専攻が設置され、幼児学研究（幼児教育学、幼児心理学、幼児保健学という3分野）の人材育成が始まっています。半世紀にわたって日本の幼児学研究の中心を担ってきているのが、まさしく広島大学教育学研究科附属幼年教育研究施設です。清水凡生教授の定年（平成9年3月）に伴い、後任として医学部小児科から平成13年の教育学部の改組まで約4年間、幼年教育研究施設のみなさんと一緒に研究をさせていただきました。学部を移っての環境変化の不安に対して、幼年教育研究施設の教員はじめスタッフならびに大学院生のみなさんに、ほんとうに親切に指導いただけたこと、感謝の気持ちでいっぱいでした。その後、教育学部の大学院講座化に向けた大きな改組となり、当時の山崎晃教授、鳥光美緒子教授とともに幼年期総合科学専攻をどのようにしていくのか、毎日多くの時間を費やし、利島学部長に何回も交渉に上がったことが、頭に浮かびます。最終的には心理学専攻と教育学専攻にそれぞれ分割された形になりましたが、教育学研究科附属研究施設としての幼児教育学、幼児心理学は改組後14年を経て、今日まで脈々と幼児学研究の発展と人材育成を担い、日本の幼児学の頂点として活躍されている姿に敬服しています。

幼児保健学は心理学講座に移ることになってしまいましたが、数少ない大学院生が活躍しているはずで、現在は広島大学病院小児科で診療を行っています。小児診療の医療スタッフとして幼児教育学出身の藤原さんにはチャイルド・ライフ・スペシャリストとして、非常に大切な職種として働いていただいています。また臨床心理士も心理学講座の出身です。総合病院は5年に1回は日本医療機能評価機構が実施する病院への第三者評価で認定を受け、基準に達していることが要求されています。小児病棟はチャイルド・ライフ・スペシャリストや臨床心理士の活躍で、現在は最高の評価を得ています。私にとりまして、教育学部、教育学研究科での活動の中で、現職場において重要な人材に出会えたのは、幼年教育研修施設あったことだと感謝しております。

幼児学というのは広島発の学問分野だと思っています。教育学、心理学の基礎研究の成果を基盤として、子どもの発達段階での支援、指導への実践に結びつけること、いわゆる臨床現場への還元が重要です。幼児教育、幼児心理の出身者が医療現場で活躍いただけることもそのひとつであろうと思います。優秀な大学院生の輩出とその将来を保証出来る環境が整っていくことが大切なのですが、現在の国立大学を含めた高等教育機関には多くの課題が山積しています。2018年からの18歳人口の減少、大学の運営費交付金の削減の継続、そして文系学部の今後の変革、教育学研究科にもこれからの研究科としての方向性や改組が差し迫っているものと思います。広島大学教育学研究科の目玉の一つとして、附属幼稚園を一体とした幼児学の研究環境を維持していくことは容易ではないかもしれませんが、サステナブルな研究成果の発表と人材育成、それに基づいた初等教育や保育学への貢献は重要な課題であろうと思います。幼年研究施設は日本の有数の幼児学研究機関として、在籍教員、大学院生、そして出身者が一丸となって、発展させていくことが必要です。50周年の節目を契機としてさらなる団結力で今後の多くの問題点の解決と発展に結びつけていかれることを切に願っています。幼年教育研究施設の今後のますますのご発展を祈念いたしまして、50周年のお祝いの言葉とさせていただきます。